

日文研究室だより

二〇〇八年度

会長 中西健治

私は一九六六年の春に本学文学部に入学した所謂「団塊の世代」の一人で、校舎は広小路にあった。紫式部の父、藤原為時の邸宅とする考証によって一躍有名になった廬山寺が清心館の北隣にあり、二階の共同研究室から寺の境内、庭園が手に取るように眺められた。御所は指呼の間にあり、平安文学に憧れて京都に出て来た者にとっては絶好の環境ではあった。そんなありがたい所に居ながら、うかうかと日々を過ごし、瞬間に学生生活は終わってしまった。

○ 教室で「論究日本文学」が年に一度配布されることがあり、例えば「捷解新語」という、ハンゲルで注記した日本語学習書を研究されている先生とか、中世歌謡の「宗安小歌集」に注釈をされている先生が授業をされているとわかり、遠い存在でしかなかった研究書や論文の世界がやや身近に感じられ、一方で、研究領域の広さと深さを漠然と知ったも

のである。

時は移り学生に向き合う立場となった小生に、卒業論文作成中の学生が「論究日本文学」はこの大学の雑誌ですか？と真顔で尋ねた。その時の衝撃は忘れられない。我々の学生時代とは異なり、現今の溢れかえっている日本文学に関する知識情報の中から必要なものを選択しつつ学ばねばならないことではあるが、少なくとも我が「論究日本文学」の存在は学生諸君に否応なく見せつけておくことも教育の一環かとも思ったものである。そのための財政的な検討も今後、必要だろう。

○ 昨年度は文学部創設八十周年の年にあたり、我が日本文学会も五十年を迎えた。草創期の先生方や受け継がれた世代の先生方の足跡を知ること大切だと思う。折しも今年「源氏物語千年紀」。何かにつけて源氏物語が話題になり、今まで以上に京都に関心が向けられている。本学の東京キャンパスでの京都文化講座も人気を集めているという。何しろ千年の古都である。平安時代に限らず、軍記物語や演劇、近代文学、は

ては海外の作家にまで影響を与えているこの作品を、京都で学ぶことは何にもまして好状況ではあろう。読むに煩わしく理解に遠い作品研究はいかにも典型的な虚学として敬遠されがちであるが、一方に近道や裏道、はては別の道を探してみるのも一つの知的冒険である。もちろんそれには素手で向かうことは出来ない。

○ 「口は一つ目は二つ」とある語句をめぐって歌会が沸いた。多分、禪語だろうということでも落ち着いたが、ついでにと、「大きな耳、小さな口、やさしい目」という言葉を師匠が感じ入る体で披露された。人生万般に通じる真理のように思われ、一同大いに納得したことであった。文学研究と言いながら、「小さな耳」に満足して「大きな口」をたたく、本来持っていたはずの「やさしい心」を忘れてはいないか。もう一度、自分の足元を見つめたいものだ。

○ それにしても過ぎ去った時間は取り戻せない・・・嗚呼。

(二〇〇八年一月廿日)